

研究主題「話すことの能力の指標に基づく評価の工夫」

東京都教職員研修センター研修部経営研修課

北区立飛鳥中学校 教諭 坂田 恵子

研究のねらい

中学校英語科では、話すことの能力の伸長にむけて多くの指導法が開発され、活発な指導が行われている。しかし話すことの評価は、必ずしも適切に行われていないと考える。その原因として、話すことの到達目標が明確でないこと、評価に時間がかかり簡単に実施できないことが考えられる。

そこで卒業段階で求められる話すことの能力の指標を設定し、スピーキングテスト実施を推進することで、指導の充実が図られると考え上記の主題を設定し、研究のねらいとした。

研究の方法

- 1 <基礎研究> 学習指導要領、先行研究および文献、諸外国検定試験等の分析
- 2 <調査研究> 話すことに関する指導者の意識調査、実態調査と結果の分析・考察
- 3 <実践研究> 話すことの指導の体系化とテストの作成及び実施

研究の内容と考察

1 中学校段階で求められる英語力の指標

(1) 話すことに関する指導の現状と課題

「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」（平成 15 年 3 月、文部科学省）において、中・高等学校段階で求められる英語力の指標を具体的に示す必要性が述べられている。また外部検定試験でどのような英語力が測定されるかを分析し、求められる英語力との関係を明らかにし、入学試験等で活用する方策の研究も課題として挙げられている。

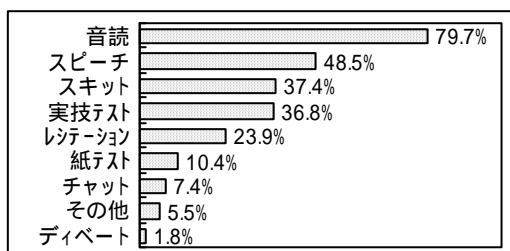
中学校の教員が生徒全員に求める話すことの能力のイメージはどのようなものであるかを探るため、アンケートによる意識調査及び実態調査（都内公立中学校英語科教員対象：回答数 157）を実施した。その結果、話すことの到達目標に関する現状については、次のようなことが明らかになった。

・卒業段階で生徒全員が身に付けるべきと考える話すことの能力は、教員によって異なる。しかも、同一学年の生徒を複数の教員が担当する場合でも、身に付けるべきと考える力は必ずしも一致しない。

また、教員の話すことの評価の現状については、次のような結果を得た。

・話すことの能力は適切に評価されているとは言えない。
・特に表現の能力をみる評価活動は必ずしも活発でない。

グラフ 1 「話すこと」の測定方法



左のグラフが示すように、話すことの能力を測定する方法として、音読を取り入れている指導者が最も多い。しかしこれは国立教育政策研究所の評価規準例では読むことに位置付けられている活動である。話す力や表現の能力を育成するために不可欠の活動ではあるが、話すことの評価の対象とするには適切ではないと

考える。能力育成のための活動と評価の対象となる活動が混在している現状が明らかになっ

た。「観点別学習状況の評価及び評定の在り方（中学校編）」（平成14年2月 東京都教育庁指導部中学校教育指導課）によれば、表現の能力の観点では「気持ち」や「伝えたい」ことを表現する能力が適切に身に付いているかどうかを、話す場面を通して評価しなければならないとしている。そこで、表現の能力を評価する方法の一つとしてスピーキングテストの実施を推進する必要があると考える。

一方、実態調査ではスピーキングテストを実施している割合は36.8%と低く、その理由としてテストのために十分な時間がとれないことや客観的な判断が難しいことなどがあげられている。

これらのことから、①中学校において育成すべき話すことの能力を明らかにすること、②話すことの能力を適切にとらえる評価方法の工夫としてスピーキングテスト実施の推進を図ること、が課題解決につながると考えた。

(2) 話すことの指標の作成

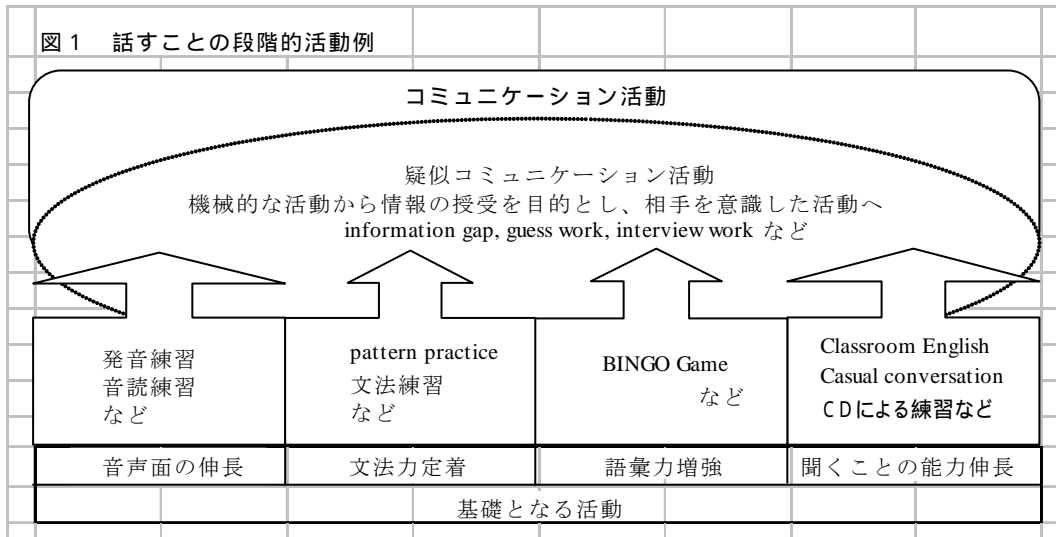
話すことの到達目標を明らかにするために、学習指導要領をもとに卒業までに生徒全員が身に付けるべき能力を下の表1のように指標としてまとめた。指標の作成にあたっては、次に示す談話能力に着目した。その理由は、①学習指導要領では、実践的コミュニケーション能力を内容の伝達に重点をおいて考えていること、②国立政策研究所の示した評価規準作成のための参考資料では発話の適切さの視点が示されていること、③先行研究によると、英語を話す能力の構成要素として不可欠なものは談話構成力と考えている指導者が多いこと、である。また、表現の能力の評価規準には、Canaleの提唱した言語能力の下位技能中の談話能力及び社会言語的能力の考えが反映されているととらえ、本研究における談話能力とは「発話に一貫性があり相手に適切に応答していく力があること」とした。そのために、事実関係を伝える、自己表現をする、話を展開する、文の構成を考えるという視点をを用いた。

表1 表現の能力育成のための指標

事実の描写	人や物を描写することができる。
	What / When / Who / Where / Why / How の要素を含んだ文で自分のことを話したり、第三者の情報を伝えたりすることができる。
自己表現	相手や場面に応じたあいさつができる。
	聞かれたことに対して Yes / No だけでなく理由や感想など自分なりの情報を1, 2文加えて述べることができる。
	読んだり、聞いたりしたことについて、感想を1, 2文程度述べるすることができる。
展開	読んだり、聞いたりしたことについて賛成／反対など自分の意志を表し、その理由を1, 2文程度付け加えることができる。
	相手に質問をして情報を得ることができる。
文の構成	相手に素早く的確に応答することができる。
	話題の中心に気をつけながら、分かりやすく話すことができる。
	聞き手に分かりやすいプレゼンテーションができる。
	7～10文程度のスピーチができる。

(3) 指導の体系化と評価活動の位置付け

話すことを支える要素として音声、文法力、語彙力、リスニング力がある。これらの要素を基本として身に付けておかなければ、話すことへの能力は育成されない。機械的な活動を通して知識を習得し、疑似コミュニケーション活動で内容伝達に重点を移し、コミュニケーション活動へと発展していく。表現の能力はこの最後の段階で評価するのが望ましい。



先行研究で、中学生の発話は発話量の増加から質の向上へと発展していくこと、また主に定型表現を使用する段階から定型表現を応用、発展させて自分なりの表現へとかえるような発話の質的变化が中学2年中盤頃より起こることが明らかにされている。このことと、学習指導要領の学習段階を考慮した指導上の配慮事項を踏まえ、3年間の指導計画と評価計画を以下のようにまとめた。事実を描写したり、簡単な自己表現をしたりすることから、考えや意見を言うことへ質を高め、それらを筋道をたてて発話できるようにと発展させる。

図2 話すことの3年間を通じた指導計画 (Sテストはスピーキングテスト、ALTを試験官及び評価者とする。)

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1年	主に自分から発信していくための活動											
	・あいさつなど定型表現の指導		Sテスト ①		・定型句やつなぎ言葉の指導 ・気持ちを述べる活動		Sテスト ②		Plus one dialogue What am I など		Sテスト ③	
	Q&A		①		Show and Tell		②				③	
2年	主に双方向でのコミュニケーションを意識した活動											
	Sテスト ①	・情報を得るための活動 ・事実を描写し気持ちを述べる活動				Sテスト ②	・行動の目的や理由を述べる活動				Sテスト ③	
	①	picture description				②	Show & Tell, Speech, chat				③ など	
3年	自己表現の要素が多く、より現実味のある活動											
	Sテスト ①	・意見や感想を言い、その理由付けをする活動 ・話の中心を明確にし、内容のまとまりや構成を意識しながら話す活動				Sテスト ②	Story re-telling chat debate		Sテスト ③	Speech(感想を言う活動を含む) など		
	①					②			③			
*例えばSテスト第1回目(①)はALTへの自己紹介とし、学年に応じて条件を厳しくする等の工夫をする。												
*例えばSテスト第2回目(②)は生徒の興味・関心に基づいた話題を設定する。												
*Sテストでは、ALTにも学年に応じてQ&Aに近い形から自然な会話へと質問をコントロールしてもらう。												

2 スピーキングテスト実施の推進に向けて

(1) スピーキングテストの実施

スピーキングテストが十分に行われていない理由として、時間がかかることが大きい。しかし、適切な応答や談話能力をみるためにも実施が強く求められている。表2では、指標に基づき1単位時間でできるテストの実施例を挙げた。評価の観点は談話能力に焦点化した。

	テスト1	テスト2	テスト3
	中学3年		中学2年
	28名		38名
所要時間	48分	45分	50分
形式	ALTと1対1の面接型 (JTEは試験を受けていない生徒の掌握にあたる)		
テーマ	自分の趣味	課題の遂行	自己紹介
即興性	△	○	△
	事前にテーマを与えるため準備可		事前にテーマを与えるため準備可
試験時間(1人)	1分30秒	1分	1分
指標との関連	<ul style="list-style-type: none"> 聞かれたことに対してYes/Noだけでなく理由や感想など自分なりの情報を1, 2文加えて述べるができる。 相手に素早かつ的確に回答することができる。 話題の中心に気を付けながらわかりやすく話すことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> What/When/Who/Where/Why/Howの要素を含んだ文で自分のことを話したり、第三者の情報を伝えたりすることができる。 相手に質問をして情報を得ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手に質問をして情報を得ることができる。 相手に素早かつ的確に回答することができる。
テスト方法	<ul style="list-style-type: none"> 自分の趣味について話をする。 暗記テストにならないようにALTには質問をばさんでもらいつ話の流れを意識的に変えるようにしてある。 	<ul style="list-style-type: none"> タスクカードを引き、書かれた内容をALTに伝える。 準備時間は1分間。前の生徒がテストを受けている時に話すことを整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> 初めて会うALTに自分のことを話す。 条件は6文以上。ただし、会話中に2つ以上の質問をし、相手の情報も聞き出す。
ALTの役割	<ul style="list-style-type: none"> 普通の会話と同じようにやりとりしながら会話を継続させていく。 テーマを事前に与えているので暗記テストにならないように、意識的に質問をし会話の流れを変えていく。 また、生徒が理由を説明する場面を作るため、Whyを使った質問は必ず入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒がタスクの内容を伝えるにあたり、不十分な情報を聞き出す。 今回は様々な目的のために、待合わせをする内容なので、課題が遂行されるよう手助けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 1分終了時に内容に関する質問を3問する。 2問はYes/No questionで、1問はWh-questionとする。
生徒が話したい話題	①自分の趣味		①ALT自身(国、趣味)のこと ②スポーツについて

(2) スピーキングテストの波及効果

テストを実施することにより、表3のような意識や態度の変容がみられた。また、事前に談話構成力に関する目標を明示し、個々の努力目標を選ばせたところ、授業中の活動や家庭学習にも積極的に取り組み関心・意欲が高まった。

意識	英語で話してみても、初めて話す力がつくと思った。自分の質問に答えてくれてうれしかった。書くのは結構自信があったけれど、実際に話されると難しいと感じた。自分の弱点がわかった。
意欲	もっと話したい。もっと内容のレベルをあげたい。もっと長い時間話したい。もっと経験が必要だと思った。
学習姿勢	発音がよくなるように音読練習をたくさんした。英語の音楽などを聞いた。 授業中の先生の英語を真剣に聞くようにした。先生の質問に文で答えるようにした。
今後の指針	もう一度1年生からの教科書を読み返そうと思う。日頃の授業でのリスニングが大切だと思った。 英文をたくさん読むようにしたい。単語力をつけたい。

今後の課題

- 1 話すことの能力伸長のための資料となるよう発話データ共有・集積の体制を作る。
- 2 評価の客観性を高めるために、評価事例集を作成する。
- 3 今回設定した指標の妥当性を、生徒の発話から検証する。